

令和2年度 浄土宗総合研究所 公開シンポジウム

# 『オンラインにおける寺院活動 —デジタルトランスフォーメーションの潮流の中で』報告①

さる令和3年2月15日にオンライン開催された浄土宗総合研究所公開シンポジウムの一部を報告します（続きは次号に掲載）。当日は180名以上の方々が視聴し、終了後のアンケート（計106通回収）によれば、今回の企画について「とてもよかったです」「よかったです」との回答が95%以上を占め、また「今後、寺院活動でオンラインを取り入れる必要がある」との声も9割以上で、関心の高さがうかがえます。

なお、研究所HP([jsri.jodo.or.jp](http://jsri.jodo.or.jp)／右記のQRコード)より当日の録画動画の視聴、および資料のダウンロードができます。



## 趣旨説明

くどうりょうどう  
**工藤 量導** (コーディネーター／浄土宗総合研究所研究員、大正大学非常勤講師)

今回のシンポジウムの趣旨は、寺院活動におけるオンラインの今後について、どんなメリットやデメリットがあるのかを一緒に考えてゆこうというものです。

ここでは身近な例やオンラインに対する考え方などを紹介していきます。

### 研究所のテレワーク

2020年4月の緊急事態宣言から2週間後に、毎週行われていた情報連絡会をオンラインで初めて行い、その一月後には対面とオンラインのハイブリッド研究会を開始し、やがて本格化しました。2019年と2020年の研究会の開催数と参加者を比較してみ

ると、開催数はほぼ横ばいですが、参加者はなんと「1.5倍」に増加しました。研究所のスタッフが北海道から福岡まで全国に分布していることを考えると、すでに手放すことができない現況です。

### 介護者カフェ・オンライン

研究所が提案して始めた介護者カフェもしばらく停止しましたが、5月にはオンラインで再開されました。当初は画面越しの集いに不安も感じられましたが、「つながりを絶やさない」という点を重視して行ったところ、誰にも話せなかったコロナ禍での状況が露わになり、参加の方々には歓迎されました。



情報連絡会オンライン(ハイブリッド)の様子

### オンライン法要

基本的に寺院側によって主導され、本堂の法要と遠方親族をつなぐハイブリッド法要の形式はおおむね好評なようです。大正大学地域構想研究所のコロナ禍の影響についてのアンケート調査では、年配者の反響がよくなかったという意見もありますが、20件以上行ったベテランの方からは「ご家族から好



評」とのコメントが寄せられ、またオンライン座禅会は国内外から150名以上の参加があったという方もおられます。一方で、かえってリアルな法要の大さを知ることができた、過度なオンライン化が心配、寺院に行かずオンラインで済まされる不安がある、便利だが収入があるどころか赤字との指摘もみられました。

### オンライン葬儀

こちらは葬儀社側の主導といってよいと思います。ある葬儀社のアンケートでは、オンライン葬儀の認知度は41%ですが、実際に参列した人は1%ほどでまだ事例は少ないです。肯定的な回答は7割ですが、年齢があがるにつれて否定的な意見が増えます。オンラインと対面の両方が選べる場合は、対面62%とまだ対面の方に分があります。知人のフェイスブックにオンライン葬儀に関するコメントが寄せられていたのですが、ご家族が親族向けにスマートフォンで生中継している、火葬場は撮影禁止のことが多い、宗派によっては印を結ぶなどの引導作法がオンラインに不向きといった声や、リモート葬式を行った若い喪主の方が親戚から批判を受けたケースも（仏教が台なしだ、スマートフォンがない人もいる…）もあったようです。ご遺体が動画として映ることの違和感を訴える声も根強いと感じます。

### オンラインは寄り添い!?

世界のビジネスでは、オンラインとオフラインが融合する「OMO (Online-Merge-Offline)」という考え方が浸透してきていて、オンライン側を土台とするサービスがどんどん進められています。データや

IT技術を生かして、ユーザー一人ひとりにきめ細やかな対応をして接点（オンライン）を増やし、そこから「人間対人間」のコミュニケーションへつなげてゆきます。サービスという一面から見れば、「オンライン=寄り添い」なのです。宗教者的好むこの言葉がビジネスの文脈で出てくることに驚きました。

### オンラインで失われるもの

オンラインでは「移動の豊かさ」が失われてしまうのではないかという指摘がありました。たとえば、コンサートに行くとして、朝起きてから楽しみに準備して移動する時間があり、催しを終えて、それを噛みしめる帰り道もある。実はお寺へのお参りも「行き道と帰り道の前後も含めた体験」ではないかと思います。本堂の中だけでなく、行き帰りの境内の風景も美しいですよね。つい見落としてしまいがちな、「オンラインで失ってはいけないもの」でしょう。

### 人間の五感はオンラインだけでは信用しない

霊長類研究者の山極寿一先生によれば、インターネットやスマートフォンはいわば脳でつながる装置で、安易に「つながった」と錯覚しますが、実際には信頼関係は担保できません。今でも合宿して一緒に食事をして、お風呂に入って、身体感覚を共有することでチームワークを高めています。オンラインはどうしても視覚・聴覚が中心となりますが、触覚・嗅覚・味覚という「他者と共有できないはずの感覚」こそが信頼関係をつくるのだといいます。

### 必要なのはコンパス

最後にこの言葉を紹介します。「変化する時代に地図は役に立たず、必要なのはコンパスだ」（元MITメディアラボ所長・伊藤穰一氏）。激動の時代に正確な地図を作っていても、どんどん変わってしまいますので、必要なのは方向感覚（コンパス）なのだと。その土台を見定めるためには、まずは私たちの足元、すなわちインターネットと寺院活動の歴史を振り返ってみることが重要だと思います。

# 「インターネットの進展と寺院活動」

いまおか たつゆう  
今岡 達雄 (浄土宗総合研究所副所長)

令和2年度の情報通信白書によれば、わが国における個人のインターネット利用率は89.8%に達しており、その利用のうち63.3%はスマートフォンで行われています。もはや、インターネットを利用して、遊び、情報に触れ、買い物やコミュニケーションを行うことが人びとの日常的な行動になっています。そこでインターネットの進展と寺院活動の関係について、今後の展望を含めて概観してみました。

## なぜインターネットなのか

私がインターネットの可能性に着目したのは1994年でした。今までこそハイパーテキスト(文字、絵、動画、音で作成した文書)の情報発信は、ブログやSNSなどを通じて誰でも簡単にできるようになりました。このような情報発信が可能になったのは3つの要素技術が出そろった1994年以降のことです。3つの要素技術とは、第1がハイパーテキストの記述方法(HTML:ハイパーテキストマークアップ言語)、第2がハイパーテキストのコンピュータへの記録方法(Webサーバー)、第3がWebサーバーから情報を引き出すための表示プログラム(Webブラウザ)です。これらを組み合わせたのが「World Wide Web(WWW)」であり、ちょっと技術に詳しい人ならば簡単に情報発信できるようになったのが1994年だったのです。

つまり、文字、絵、写真、動画、音声、音楽などのさまざまな情報を自由に組み合わせ、世界中のどこからでも、いつでも必要なときに情報を発信したり、情報を入手したりすることが可能になったのです。これが何に使えるのかはまだよく分かりませんでしたが、無限の可能性を持った技術によって、広大な情報空間が生み出されたと感じたものです。ちなみに、書籍販売のAmazon.comは1994年に、情報検索のYahoo!は1995年に設立されています。

## インターネットと 寺院ホームページの作成

このようなインターネットの進展を見つめながら、この情報空間の中で僧侶として、寺院住職とし



善照寺のホームページ

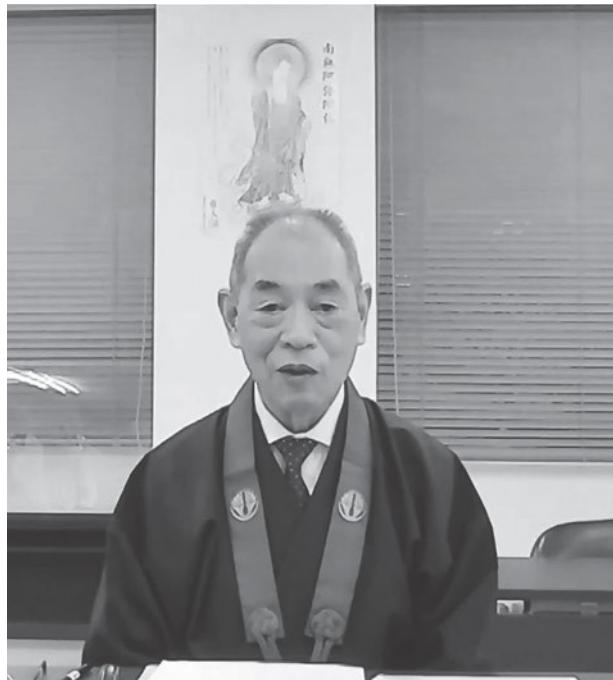
て、何ができるのかを考えました。そこで早速ドメインを取得し、インターネットを使ってどんなことができるのかを確かめるために、自坊である善照寺のホームページを作成してみました。1995年12月のことでした。

まず、情報発信として、①寺院概要、②年中行事の説明、③浄土宗の教義と解説、④法話・寺報・論説・エッセイ、⑤寺宝『古本漢語燈録』(善照寺本)の画像アーカイブを作成しました。また、インターネットの特性を利用した双方向のアプリケーションとして⑥相談室、⑦懺悔室を設けました。このように一寺院ができそうなことはすべてやってみました。

多くの人に情報を視聴してもらうためには「情報を取りフレッシュすることが重要」と言われていましたから、こまめに情報更新を行っていました。また、相談室や懺悔室への書き込みは電子メールで届く仕組みを作り、必要なメールには返事をするようになりました。ところが、頻繁な情報更新や多数舞い込む相談メールへの返事を書くことにくたびれ果ててしまいました。そこで現在では、情報更新を基本的には行わないことにして、すぐに返事が必要な相談などが舞い込まないような仕組みにしています。

## インターネットと宗教

私が思いつくことですから、当然、すでに多くの宗教者や宗教団体によってインターネットが注目され、その利用状況に関する調査が行われました。その結果として1995年から2000年にかけて多数の研究結果が出版されるようになりました。特にインターネット利用が先行している米国におけるさまざまな宗教団体の活動やカルト教団に関する調査研究が行われ、インターネットを利用した布教・



伝道活動の可能性、ネット空間で行われる儀式の有効性についての議論が行われました。しかし、当時のインターネットの伝送速度では、実空間での布教・伝道や儀式参加における一体感の実現は甚だ困難であったと思います。

ところが、この分野の技術進歩は著しく、光回線の普及や無線伝送の5G化といった超高速情報伝送技術の進展と普及、あるいはYouTube、Facebook、Twitter、Instagram、TikTokといったソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)の発展は、インターネット利用の様相を激変させました。これに加えて、XR(VR〈仮想現実〉、AR〈拡張現実〉、MR〈複合現実〉を総称した呼称)など実空間を体験させる方法が進化したことや今後もAI技術がさらに進展することなどを考え合わせると、実空間以上に洗練された宗教的な体験を実現することが可能になると思われますし、新しい儀式のあり方に関する研究も必要になってくると思われます。

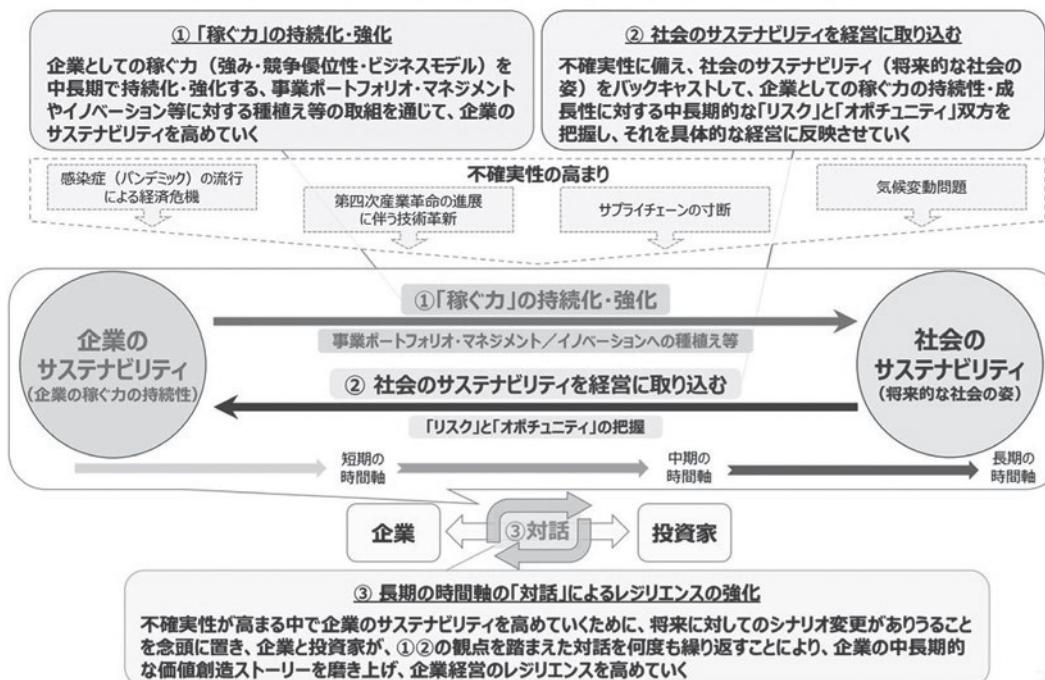
## DX から SX へ

デジタル技術の進展はとどまるところを知りません。給与がデジタル通貨で支払われる日はそう遠くはありませんし、そのときにはお布施もデジタル通貨で行われることでしょう。葬儀や法事の申し込みは電子メールやボイスメールで行われるでしょうし、寺院活動もまた「デジタルに対応した新しい様式」に変化していきます。これが「デジタルトランスフォーメーション（DX）」なのです。それは社会的習慣や経済的取引慣行によって守られてきた文書・印鑑中心の伝統的社会システムが、コロナ禍をきっかけにして急速に変化しつつあるからで、寺院活動だけが特別扱いを受けるわけには

いきません。

既存佛教教団やそこに所属する寺院がこれからのデジタル社会の中で存続するためには、単なるデジタル化ではなく、教団や寺院が将来的な社会においてどのような役割を果たしていくのかを明確にする必要があります。将来的なデジタル社会では、おそらくデジタルストレスが蔓延する社会になることでしょう。単なるデジタルトランスフォーメーションではなく、人びとの受けるデジタルストレスの解消を目指した持続可能な生活変容としての「サステナビリティ・トランスフォーメーション（SX）」こそ、これから宗教教団や寺院が目指すべき目標のような気がします。

### サステナビリティ・トランスフォーメーション（SX）とは



経済産業省「サステナブルな企業価値創造に向けた対話の実質化検討会 中間とりまとめ」  
2020年8月より

## パネリスト報告

# 「道具の是非より、伝えるこころ（仏心）の問題」

すぐれ けいこ  
**勝 桂子**（行政書士、葬祭カウンセラー、任意団体＜ひとなみ＞主宰）



勝先生には寺院においてどのようにオンライン活動を取り込んでいくべきか、その構えについてお話をいただきました。

## 目立った慎重論

オンラインで寺院活動を行うことについて、今も慎重論が目立ちます。導入しなければいけないとわかつてはいるものの「本堂にWi-Fiを通さないといけない」「法事は儀礼だから本堂で行うべきだ」「僧侶に対して敬意が薄れ安易になる」等の意見があるようです。でも本当にそうでしょうか。たとえばお位牌なども象徴的ですが、日本人は「目に見えないものに対して祈る」ということに慣れている部分もあり、その点がきちんとできれば、感染症対策等の理由でオンラインを積極的に導入しても良いのではないかと考えておます。

## 本来の宗教は革新的

宗教は「新しい技術と親和性がない」ということはないと思います。東洋において木版技術が広まったのはお経を広めるため、西洋で活版技術が発展したのは聖書を広めるためでした。近代においては、放送技術が広まる中で宗教団体が番組を担当する事例などもありました。したがって、宗教とは最新の技術を使って1人でも多くの人に教えを広めたいと願うものではないでしょうか。

## オンラインの懸念点は解決できる

オンラインにおける寺院活動の懸念点として「集中して聴いてもらえない」「テレビと誤解して法話中に私語が飛び交う」などがあります。これらは「ミュートにする」「あらかじめマナーを伝えておく」「対話をする場面をつくる（参加型にする）」などの工夫をすれば解決できることです。なにより、寺院側に本当の意味での「伝えるこころ」があれば、マナーの問題は起こらないと思います。必要な場面で効果的にオンラインを取り入れるということが大事です。そうであれば法事等の儀礼の場面でも、少しずつ取り入れられてゆくのではないでしょうか。

## 目の前の苦を救うため

コロナ禍で、かつてないほどの不安と苦が社会に充満しています。たとえば職を失った人に「奉仕したい気持ち」に気付いてもらう語りかけをするなど、メールや電話、SNSを通じてもできる布教があります。緊急避難的な対策としてではなく、目の前の苦を救うために、仏教に何ができるかを考えてほしいと思います。

今日からできる  
オンライン活用

・（本堂に）「Wifi使えます」、（LINEなどの）「ビデオチャット使用可能です」という貼紙をする  
※多くの人は、お寺でスマホを見るのは失礼と思っている  
・法事などを「密になるので」と遠慮する連絡や相談があった際、「こちらで法事をおこなう様子をLINEでご覧になりますか？」とお声かけする  
※右の画像は以下からダウンロード可能です。  
<https://hitonami.net/articles/religious-articles/3572/>

撮影・ビデオ通話OK  
wi-fi SSID :  
password :  
スマートフォンとAndroid wi-fi を選択しました。  
本日ご来院いただけなかった方の為に  
動画撮影やビデオ通話等をご利用ください。  
ご希望の方は、お問い合わせください。

寺院におけるオンライン活用の一例

令和2年度 浄土宗総合研究所 公開シンポジウム

## 『オンラインにおける寺院活動 —デジタルトランスフォーメーションの潮流の中で』報告②

前号に引き続き、令和3年2月15日にオンライン開催された浄土宗総合研究所公開シンポジウムについて、3名のパネリストの発表および全体ディスカッションの概要を報告します。

### パネリスト報告



## 「コロナ禍で続けた オンラインの寺院活動」

### 大江田 晃義

(浄土宗教師、南米開教区クリチバ日伯寺 主任)

大江田先生にはブラジルでの18年におよぶ開教活動を通じて感じたこと、  
とくにコロナ禍における布教活動についてお話しいただきました。

### 1年間続けたオンラインの活動

コロナ禍でオンライン活動を開始して1年間、朝と夕方の法要のライブ配信を毎日継続して行っています。当初はこんなに長く続くとは思っていませんでした。朝勤後に、家族で行うラジオ体操も生配信しており、対面では出会ったことがない方も息子の成長とともに応援をしてくれています。ほかにも青年の集い、仏教講座、誕生会、慈善バザーなどもオンラインを利用して行いました。

オンラインで法事を行ってみると、自肅疲れもあってか、法要後は一時間以上にわたってお話が盛り上がるようになりました。一緒にお経を唱えることができるようPDFデータで経本を送ったり、葬儀用の手作り動画を流したり、いろいろと工夫をしてみています。

### 国境・距離を越えてつながるご縁

檀家制度のないブラジルだからこそ、広く誰にでも

布教活動をしていくことが重要です。日本に母体があり、日本とのつながりが強い宗派なので、それを活かすのにオンラインは非常に重要なツールです。オンラインは国境・距離を越えて人とつながることができて、布教活動の幅を広げるチャンスもあります。

たとえばブラジルにいながらでも、日本で開催されている別時念佛会にオンライン参加できます。また、海外に住む家族や親戚がそれぞれ別の地域や国から

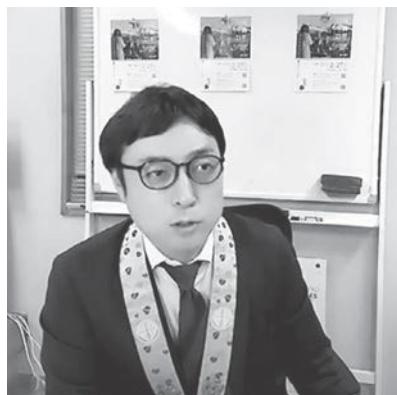


同時に法事に参加して、顔を見て話ができるることでも好評を得ています。

## 移動距離が長いブラジルでの活動の中で

開教寺院があるクリチーバ市から北に350km離れたカルロポリス市では、毎年お盆供養として灯籠流し

を行っていますが、コロナ禍でもライブ配信をすることになりました。同じ週末、今度はクリチーバ市から南に350km離れたラーモス市の住民向けにオンライン法要を行いました。従来であれば、この二つの法要は移動距離を勘案すると両立は難しい日程のはずでした。これだけ国土の広いブラジルにおいて、現状の開教師の人数で活動してゆく上では、オンライン法要が重要なオプションであることを考えさせられた事例でした。



## 「コロナ禍だからできた大学でのフィールドワークと寺院活動への応用」

### 齋藤 知明

(浄土宗教師、大正大学人間学部教育人間学科 専任講師)

齋藤先生が大正大学の授業で、学生たちと実践してきたフィールドワークの事例は、ニューノーマルな寺院運営のあり方を検討する際にとても興味深いものです。

### コロナ禍は実はチャンス

大正大学のサービスラーニングという授業では、オンラインを駆使した地域交流・社会貢献の方法を学生たちと共に模索して、オンライン盆踊り、南三陸オンラインツアーやオンラインの追悼イベント、またクラウドファンディングを利用した地域物産展などを実行しました。南三陸オンラインツアーでは、事前にワカメを郵送して、ワカメ料理のコンテストを行うなど、オンラインだからこそ生まれたユニークなアイデアもありました。

### オンラインのメリットとデメリット

オンラインのデメリットとしては、地域性が薄くなってしまう、世代間交流が難しい、いつでもどこでも参加できることで逆に非日常性が失われてしまう、通信機器や知識の差が出てしまう、感覚の共有が限られてしまうなどを挙げることができます。

逆にオンラインだからこそそのメリットとしては、ある地域と他の地域を容易につなげられる、

邪魔が入らないので目の前のこと集中できる、遠方のこととも気軽に学べる、自宅から家族も一緒に参加できる、人と人が結びつきやすい、といった点があります。

オンラインはオフラインの代替案であると見なされがちですが、実際にはオンラインとオフラインの間には相補性があるので、オンラインをオフラインの代替案と受け止めてしまうのは早計だと思います。

### 離れていても感覚は共有できる

オンラインはどうしても感覚の共有が制限されてしまうので、何らかの対策が必要となります。そこで事前



南三陸オンラインツアー

南三陸から事前に送られてきたわかめを使ってそれぞれが調理、ワインで乾杯

に郵送するなどして共有する工夫をすればよいのだ  
と考えました。先ほどのワカメの事例は味覚の共有  
であり、またオンライン追悼イベントでは事前に青色  
のロウソクや手作りのお香などを参加者へ郵送する  
ことで、視覚や聴覚だけではなく、嗅覚と触覚も共有  
することができます。

イギリスの社会学者であるジェラード・デランティ氏  
によるコミュニティ論には、オンラインを用いることで、  
既存の関係をつなげ直し、より活性化させることが可  
能であるという意見もあります。地方寺院にとっては、  
オンラインを有効利用すれば、起死回生の機会にも  
なりえるのではないでしょうか。



## 「そのオンライン、 本当に必要ですか？」

### 小野木 康雄

(文化時報社 代表取締役社長兼主筆)

文化時報社では、実は寺院活動のオンライン化、あるいはDXというもの  
に対してあまり肯定的な報道をしてこなかった側面があります。小野木先生  
にはその胸の内を話していただきました。

### オンライン法要の取材

一般の会社でも行われている会議や事務などをオ  
ンライン化することについては異論がないですし、仏  
教関係の催しや行事でオンラインを利用するのもおお  
むね問題ないと思います。ただし、葬儀や法要などの  
宗教儀礼をオンラインで執り行うことについては慎重な  
姿勢が求められるのではないかでしょうか。

2020年5月の時点で「ネット法要」という言葉が紙面  
を賑わせました。ただし、その内容はオンライン法要を  
積極的に導入しようという趣旨ではなく、あくまで選択肢  
の一つにするというものでした。その後、オンライン法要

に関する取材を続けましたが、「あまり目立ちたくない」  
「リアルを疎かにしていると思われてしまう」という懸念  
から取材が断られるケースも少なくありませんでした。

### 文化時報での社説を通じて

オンラインでの葬儀や法要に関しては、実際に私自身も参加者として経験したうえで、「オンラインで参列  
できるのか」(2020年5月16日) や「画面の先が見え  
ない」(9月26日) という社説を書きました。画面の先  
で行われている法要の意義が伝わってこないという  
疑問が生じて、「自分は一体、何に向かって手を合  
させていたのだろうか」と自問しました。率直に言えば、  
本当の意味で「参列」しているとは言い難いと思いま  
す。なお、ちょうど本日の紙面に掲載されているので  
すが、「DXに踊らされるな」(2021年2月15日) という  
社説も執筆しました。

### 誰のためのDXか

経済産業省の「DX推進ガイドライン」には、DXが  
競争上の優位性を確立することであると定義されてい

### 寺院活動のオンライン化

1. 会議・寺務 ⇔ ○  
リモート宗会（浄土真宗本願寺派など）
2. 催し・行事 ⇔ ○  
全国曹洞宗青年会「オンライン坐禅会」  
日蓮宗「家にいる子どもたちへ」（写経・写仏）
3. 葬儀・法要 ⇔ △



ます。しかしながら、いったい寺院は何と競争しなければならないのでしょうか、そもそも寺院にとってDXは本当に必要なのでしょうか、問い合わせは尽きません。

もし、明確な展望や大義名分がなく、なし崩し的にDXを進めているのであれば、仏教界は一度立ち止まるべきであると考えます。たとえDXを進めるにしても、将来像をしっかりと描いたうえで導入した方がよ

いと思います。

ちなみに、新聞業界ではDXが上手くいっておりません。現状では、ポータルサイトとの兼ね合いで、新聞社が経費を使い、取材の時間を費やして得た情報をタダ同然で読めるというビジネスモデルが確立してしまっています。仏教界にはどうか新聞業界の二の舞になるような選択をしてほしくないと思っています。

## 全体ディスカッション

コーディネーター：

工藤量導

パネリスト：

今岡達雄

勝桂子

大江田晃義

斎藤知明

小野木康雄



写真：文化時報社提供

## オンラインの是非

●工藤 オンラインによる法要や葬儀、イベントに関する将来的な行方についてどのような見立てを持っていますか？

●勝 葬儀の話からいきなり入ると「是か非か」という論点になってしまい、オンラインでは温度感や匂いが伝わってこないといった欠点があげられがちです。私自身はそれ以前の問題だと思います。つまり、仏教寺院が何を伝えたいかということです。これだけ世間が不安にさいなまれている中で「何かを伝えたい」と思わないであれば、厳しい言い方ですが、宗教者として終わっていると思います。何かを伝えたいと思っている方は、オンラインであれ、SNSであれ、地方寺院であれ、すでに何らかの手段で発信をしています。

●工藤 今よりもオンラインの技術が進展して、五感を網羅するような洗練された体験を創出できるようになれば、法要などに応用できる可能性はあると思いますか？

●小野木 そういう可能性はあると思います。ただ、今のオンラインの技術はまだあまりにも拙いと思います。キーボードを叩いたり、指先で触ったりすることがいちいち必要です。たとえば、自分のアバター的なコピーロボットが現地にあって、読経の声を聴いたり、焼香の香りをかいだりできて、まるでその場にいるような雰囲気をオンラインで味わえるようになればよいと思いますが、現段階では視覚と聴覚に頼りすぎていると感じます。

●工藤 ブラジルでのオンライン活動を続ける中で、お念仏などの「儀礼」の重要性を感じる場面などはあったのでしょうか？

●大江田 コロナ禍で不安を感じる方が多い中で、手を合わせて、お念仏をして、ご先祖様にお参りする、という一連のお勤めによって「心が癒される」という声をよく聞きました。ブラジルではポルトガル語での法話や説明を求められる場面が多いので、以前はそちらの方が重要だと思っていたのですが、コロナ禍とすることもあってか、日系人の方々が「お経を聴くとなんだか安心する」と言っていたことの意味、儀礼の価値を再認識しています。

●工藤 儀礼とオンラインの親和性についてどのように考えますか？

●齋藤 個人的には儀礼とオンラインの親和性は低いと思っています。儀礼というのは秩序立てて決まったことを肃々と進めてゆくものですが、それならば録画したものを観ると大差ないわけです。オンライン法要にしても、儀礼の部分よりも、その後の檀家さんとのコミュニケーションについて貢献できる可能性があるので、むしろその部分でオンラインを利用して補強してゆくことが重要なのではないでしょうか。

●今岡 その時々に人々が何を欲しているのかというニーズによって、オンラインでの儀礼という形もさまざまに変化してゆく可能性があると思います。おそらく、法事や葬儀の時間配分や開催場所といった常識もどんどん変わってゆくことでしょう。私たちは社会から何が求められているのかを敏感に受け止めて、そのうえで本質的な部分を損なわないよう気をつけながら、慎重にその周辺部を変容させてゆく必要があると思います。

●小野木 大義や展望のないオンライン化はいくらやっても響かないと思います。若手僧侶の中には話題作りのためだけにやっているのではないかという行事もあり、新しいことに飛びつくだけの状況が蔓延するのは見苦しいと感じています。個人的には「宗教者なら動じるな」と言いたいです。大義なき、展望なきオンライン化やDX化には断固として反対していただきたいと考えています。

## お布施のキャッシュレス化について

●工藤 お布施のキャッシュレスについてどのように考えていますか？

●勝 私は大賛成です。現金の方が断然生臭いと思います。たとえば昭和の頃は、護摩を梵いているときに当たり前のように現金が飛び交っていましたし、それが現在はインターネット上で行われるようになったというだけのことだと思います。今後はオンライン環境での発信や悩み相談などの宗教活動に対して、オンラインでお布施をいただく機会も増えると思います。

●小野木 必要とされる方がいるならばその意義はあると思います。他方、信仰心や遊び心として、2951円（福来い）の小切手や5円（ご縁）のお賽錢を大事にするという宗教文化にどう対応するかということも課題になりそうですね。

●大江田 ブラジルでは治安という観点から、ほぼキャッシュレスが日常化していて、現金を持ち歩く場面はほとんどありません。ですから、お寺の側もある程度は社会の技術的な進展に合わせて対応してゆく必要があると思います。

●今岡 信仰の証としてのお布施はキャッシュレスでも、昔ながらの物納（お米や味噌など）でも、どのような形でもよくて、私たちとしてはその思いをすべて受け取るという姿勢が大事だと思います。ただ、特定のキャッシュレス方式でしか受け取らないというのはあまり望ましくないので、世の中の趨勢をしっかりと見極めたうえで導入するタイミングを見計らう必要があるでしょう。

## 若い世代へのアプローチ

●工藤若い世代へのオンラインを通じたアプローチとしてどんなことが考えられるでしょうか？

●大江田 ブラジルには日本に興味のある若者がたくさんいるので、日本文化と交流するためのネットワー

クを作つて、お寺がその仲介役になれるのではないかと考えています。その手段として、実際に日本に行けなくても、オンラインでつながりを作ることが可能ですし、お寺の人脈を生かしながら継続的な交流をサポートできればと思います。

●工藤 オンライン授業の経験の中に、若い世代と一緒に協働してゆくためのヒントはありませんでしたか？

●齋藤 若い世代が自分自身で課題を見つけていくことが大事だ、という考えのもとで授業を行ってきました。実際に学生たち自身がオンラインでできること、できないことについて試行錯誤を重ねてチャレンジしてくれました。もし、若い世代にアプローチしたいならば、お寺自身も「当事者」になって、彼らとともに地域課題と一緒に考えてゆく、悩んでゆく、そして探求してゆくという姿勢が大切だと感じています。

## オンラインで失ってはいけないもの

●工藤 オンラインで失ってはいけないもの、とりもなおさずオンライン時代だからこそ常に大事にしておきたいことは何でしょうか？

●勝 技術の進展による新たな社会の到来は「人間らしさを失わせる」方向にあったと思います。であれば、お寺や僧侶は「人間らしさを取り戻す」ということを、オンラインを通じて訴えかけてゆくことが求められているのではないでしょうか。法話などにそういう要素を盛り込んでゆくことも大事だと思います。

●大江田 オンラインであれオフラインであれ、その人といかにつながって、いかに寄り添えるか、一人一人にしっかりと向き合うことが大切だと感じています。よいことにオンラインもオフラインもありません。人の考え方や亡き人への思いはさまざまでありますし、私たちはその方々の思いをいかにくみ取つて、僧侶として何が

できるのかを考えて、できることを精いっぱいやってゆくことが大事だと思います。

●齋藤 オンラインとオフラインは対立するものではなくて補い合えるものだと思います。この一年間、故郷の酒田市で四季を感じながら生活できたことは、まさに人間らしさを感じさせてくれるものがありました。一方、全面的にオンラインになったことで、これまでのローカルなやり取りやつながりが薄れてしまつて寂しさを感じる場面もあり、それぞれの重要性を考えさせられました。ともあれ、地域を越えられるオンラインというインフラは、今後の地方寺院にとって大きなアドバンデージになりえると思います。

●小野木 大江田先生と齋藤先生の事例から多くの学びがありました。いずれも檀信徒のため、学生のため、地域社会のためといった大義がしっかりとそなわっていたと思います。繰り返しになりますが、大義と展望のないオンライン化、DX化はありえないと強調したいです。

●今岡 その大義なのですが、これからのキーワードは「サステナブル」という点にあると思います。欲求をできるだけ最小化して、いかに持続可能かということを念頭に行動してゆくことは、実は非常に仏教的な考え方もあると思います。

●工藤 本日の先生方との対話を通じて感じたのは、宗教者として「オンラインの向こう側を想像する力を試されているのではないか」ということです。withコロナ、アフターコロナの時代がもう少し続く中で、オンラインだとしても、ご縁がつながることのうれしさ、継続してゆくためのアイデアにあふれていました。一方、常に忘れないでいたいのは「そこに伝えたい想い（仏心）はありますか？」「そのオンラインは本当に必要ですか？」という問い合わせです。オンラインの得意とする点、苦手とする点をしっかりとふまえて、宗教界全体として前進してゆければと思います。

研究所HP ([jsri.jodo.or.jp](http://jsri.jodo.or.jp) / 右記のQRコード) より当日の録画動画の視聴、  
および資料のダウンロードができます。

